

第86回麻布獣医学会 一般演題13

リンパ節転移を伴った未分化悪性腫瘍に対し 緩和的外科切除と放射線治療をおこなった一例

山本 哲也¹, 高梨 太郎¹, 杉山 大樹¹, 圓尾 拓也^{1,2}, 信田 卓男^{1,2}

¹麻布大学附属動物病院腫瘍科研修医, ²麻布大学 獣医学部

【症例プロフィール】

犬 ポメラニアン 9歳4ヵ月 避妊雌 体重
4.68 kg

本学初診約8ヵ月前, 下顎先端の皮膚に存在した腫瘍が緩徐に増大してきたとの主訴で紹介動物病院を受診した。抗生剤と消炎剤の内服にて治療したが, 約3ヵ月前, 腫瘍のさらなる増大が認められ, 紹介動物病院にてFNAを実施し, 外注病理検査にて悪性黒色腫の可能性と診断された。その後, 腫瘍の自潰・出血および増大が認められたため本学を受診した。

【初診時所見】

本学初診時, 腫瘍は下顎先端皮膚に存在し, 3.2 × 3.0 × 2.5 cmの軟性で一部表面に自潰があり有茎状で下垂し, 口腔内は切歯前方の粘膜面は隆起していた。左下顎リンパ節は約1.5 cmに腫大し, その細胞診からは転移所見が認められたが, 遠隔転移所見は認められなかった。腫瘍と左下顎リンパ節のコア生検の結果, 未分化肉腫と診断された。

【診断】

皮膚の未分化肉腫 T3N1bM0

【治療】

全身麻酔下で左下顎リンパ節切除術を行った後,

腫瘍尾側よりアプローチし腫瘍底部は下顎骨領域まで, 口唇側は口唇皮膚領域で切除し, 皮膚フラップを形成した後閉鎖縫合した。術後摘出部位にアクリジンオレンジを局注し放射線治療10 Gy照射を行った。病理診断名は「未分化悪性腫瘍。おそらく乏色素性悪性黒色腫」であった。核分裂指数は高倍率視野あたり2個程度で脈管内浸潤, 左下顎リンパ節浸潤が認められた。また, 初診時より補助療法としてピロキシカムを約1年間投与した。現在, 術後1年4ヵ月が経過しているが局所再発所見はなく, 遠隔転移所見も認められていない。

【考察】

通常犬の皮膚有毛部に発生する黒色腫はその殆んどが良性であり悪性のものは稀である。ある報告によれば皮膚悪性黒色腫の肺転移までの期間の平均値は13ヶ月とされている。本症例ではリンパ節転移を伴う悪性黒色腫(未分化悪性腫瘍)で脈管内浸潤もあり, 予後不良であると思われたが, リンパ節切除を含む外科切除とアクリジンオレンジを用いた放射線療法, ピロキシカムという集学的な治療により良好な経過が得られている。更なる症例の集積により, 各治療の有効性を検討していきたい。